大島の歴史随想

神崎辰雄
（会員・鶴見町大島）

私は戦後外地より復員して、大島の歴史と神崎家のルーツに興味を覚えるようになった。その当時、佐伯史談会の幹事をされていた羽柴弘先生が、大島中学校の校長として赴任してこられ、神崎本家に保管されていた慶長年間の古文書数通を、すべて解読して下さったことでいよいよ興味を深くした。

全国に大島と呼ばれる島は多いので、郵便局では豊後大島とかしらに豊後をつけて区別している。

高政公の初め頃の古文書には「おきの嶋」となっているが、思うに公が鶴屋城の竣工により、本丸高くそびえ建つ三層の天守閣に立ち、東南のかなた遥か沖合に浮かぶ島を望見して、通称、「おきの嶋」と呼んでいたのではないか。

神崎家の先祖は織田信長の武将で、勢洲桑名の城主四十万石滝川左近将監一益の侍大将、望月内蔵亟源信房である。禄高は四千五百石であったが、源平時代には源氏の重臣の家柄で、奥方は京都公家の出身と伝えられている。

天正三年（一五七五）四月、武田勝頼は大軍をもって奥平信昌の守る長篠城（愛知県鳳来町）を包囲した。攻防むなしく落城を目前にした奥平信昌は、鳥居強右衛門勝商を使者にたて、織田信長に援軍を請うた。

信長は武勇にすぐれた滝川一益・羽柴秀吉・丹波長秀等に命令し、徳川家康と共に長篠城の救援に向かわせた。

このとき侍大将、望月信房はその先陣を受けて三千丁の鉄砲隊を指揮して武田の騎馬軍団を壊滅し、長篠城落城を救った。この戦いがこれまでの騎馬戦法より、鉄砲主戦に変わったと言われる長篠の合戦である。

勝頼は天正十年（一五八二）三月、天目山（山梨県大和村）に追われ、自害して果てた。

父信玄は三河の野田城攻略のとき陣中に病み、天正元年（一五七三）四月十二日、伊那駒場（長野県阿智村）で没していたが、天正三年のこの年までその死を秘密にされていたという。信玄の軍旗「風林火山」は、進攻は風のように速く、とどまれば林のように静かで、敵地の

侵略は火のように激しく、守備陣形は山のように不動という信條を誇としていたが、さしもの武田軍もこれで完全に滅んでしまった。

信長は大変喜んで滝川一益に上野の国及び、信濃で小諸・佐久の二郡を恩賞として与えている。

しかしながらその信長も、天正十年（一五八二）六月二日未明、本能寺で明智光秀の急襲に遭い、火中に身を投げ無念の死を遂げた。

「人間五十年、下天の内をくらぶれば夢幻の如くなり」。天下統一を目前にしながら非業の最期を遂げた織田信長が、愛誦したといわれる詞章である。

この時滝川一益は伊勢に帰り、柴田勝家等と共に清洲で合議し、跡目に信長の三子信孝をたてた。一方、羽柴秀吉は孫の三法師をたてて対立し、和解ができず遂に賤ヶ岳（近江の北部）で決戦することになる。

滝川一益は日頃より親睦の深かった柴田方に味方したため、望月信房もこれに従った。

秀吉の小姓で福島正則・加藤清正・加藤嘉明・脇坂安治・片桐且元・平野長泰・糟屋武則等の活躍はめざましく、「賤ヶ岳の七本槍」と呼ばれ、その武勇は後世まで名を残した。

柴田勝家は越前北庄城に敗走し、その妻お市の方（信長の妹）と自刃して果てた。

滝川一益も秀吉の咎めを受け京都妙心寺に入って剃髪し、越前に逃れるも生没年不詳とされている。

侍大将望月信房は主君と別れると京都下鴨神社に参拝し、一族の守護神として玉依姫命・建角身命のご分霊を頂き、豊後の国落住への道をとった。

木造阿弥陀如来坐像
元禄十年九月作　著者所有

途中明石に立ち寄って浄土宗の名刹、覚念寺より如来を受けている。

天正十一年豊後の国神崎（旧神崎村）に落住し、秀吉の追討を逃れるため居住地名をとって姓を神崎と改めたと記してある。

慶長五年九月関ケ原（岐阜県関ケ原町）で西軍七万、東軍八万による天下分ケ目の合戦が行われたが、信房の長男勘之亟信久、二男内蔵亟信厚は共に立派な若武者に成人し、風雲急を知ると徳川方に味方せんがため出陣しようとするが、母からとめられる。

「刀を持って人を制する者は、やがては刀により人から制せられる。武士を捨て世のため人のために盡す人になって欲しい」。と強く諌められて出陣をとどまった。

慶長六年八月五日、父信房行年四十九才で神崎の地にて没す。法名長徳院殿京山大居士、現在も神崎に墓石が残っている。

父の死後、兄信久は保戸島に渡り、浄土宗龍宝山海徳寺を開山（御領分中寺社記によれば慶長十年頃であったという）、佐賀関、正念寺より初代住職として圓擧上人を迎えている。

弟信厚は北尾日向守外二名の供を連れ大島に渡って来た。これ以前の大島はどんな様子だったのか、文献がないので全く分からない。

信厚は島の開発に励み、一族の守護神として加茂神社を建立し、また、一族の菩提を弔うため正徳庵を建て如来を安置している。

木造釈迦如来坐像
神崎信房氏所有

余談になるが長篠の合戦後、城主奥平信昌は家康の娘亀姫を二度目の妻として迎え、子孫は松平姓を許されて、亨保二年、六代昌成のとき丹後宮津から中津城に転封となり、十万石を領して百五十年間、明治に至るまで城主として続いている。

一方、長篠城の落城を救う一翼をになった望月信房は、追討される身となって豊後の地に野人として埋もれ、救

われた方は大名として家名を保ち続けたという、戦国の世の無常を痛感せずにはいられない。

こゝに望月信房、豊後の国落住のいきさつを述べさせてもらった。

毛利高政公は慶長六年（一六〇〇）四月、日田隈城より、佐伯藩主として移って来たが、高政公のすぐれた政治感覚は、まず佐伯湾の入り口に横たわる「おきの嶋」、即ち大島に目をつけた。

島は格好の船だまりを持ち、豊後水道の中心として要の位置をしめている。関ケ原の余じんがいつまた大動乱になるやも知れない。一方、天下が泰平になれば海路輸送による物産の移出や移入など、交易による藩庫の富裕をはかる前進根拠地として、大島にかけていた期待は大きかった。

こゝに大島庄屋へ宛てた古文書を紹介してみたい。

大島僧開基 信厚 ―市兵衛―┬兄久治郎
（初代庄屋）　　└弟甚一郎
（二代庄屋網頭）

当大嶋浦之儀、屋敷方之儀は不申及、野にても山にても竹木伐はらひ、麦成共粟成共　作付可申候。

年貢之儀は永代免とらせ候間、作取に可致候。堅得其意発可作取者也。

尚以小百姓にも此旨申聞せ、当年中急度麦まき可申候。

以上

元和四年　　伊勢守

十一月廿九日　　高政（花押）

大島の庄屋市兵衛へ

この文書では、大島に住むものは居屋敷は言うまでもなく、野でも山でも勝手に伐り開き、麦や粟など植え付けるがよい。年貢は永代免じとらせる。との格別の取扱いを約束している。

このことについては、佐伯藩の正史とも言うべき鶴藩略史に元和四年十一月、公農市兵衛をして大嶋を開拓せしむ。とある。

二代目庄屋宛てには次のような古文書がある。

急度申觸候。於其浦其在所の者共、網をつかい魚肴取、旅人にも何者にも賣あきなふべく候。他所の者に賣申間敷旨、余之浦方への者堅法度申付け候へ共、其浦斗はゆるし候間可得其意者也。

伊勢守

九月廿一日　高政（花押）

大嶋庄屋　甚一郎方へ

この文書ではほかの浦は禁止している漁労販売を、ここ大島だけは自由だとしている点を重視したい。さらにもう一通では

當湊おきの嶋の事、水夫役其外
諸役儀令免許候、自何方申来候共
仕る間敷者也。依如件。
伊勢守
未ノ十月廿四日　高政（花押）
おきの嶋
甚一郎其他
百姓中

これは水夫役（かこ役・海士の役目）一切を免除するとの申し渡しである。

このように大島の島民に対して優遇措置をとり、定住者を増やしていったと思われる。

甚一郎は分家して網頭となり、新しく網を構えて屋号を新網と呼ばれ、以来四〇〇年その呼称は今だに伝えられており、筆者方の初代である。

「御小姓日記」の記録によれば、阿南唯七外野村宗右衛門・岡沢六左衛門等、数人の若い藩士が大島御番所に常駐し、湾口出入の船舶を監視して上浦・中浦・下浦の漁労を糺したとある。

「佐伯の殿様浦でもつ」湾内九十九浦の総取締所として、大島御番所の存在は極めて重要であったと思う。

年代は定かでないが、阿南唯七は五代高久公六代高慶

公に仕えているので、恐らく藩政大いに整った高慶公の時代ではなかったろうか。

高慶公はお国入りのとき、江戸より一刀流の剣客恵良甚右衛門を同伴し、三神流を得意とする阿南唯七と試合をさせたが、唯七は甚右衛門を打ち負かしたと言う逸話が残っている。

現在も地下地区にある高い山を御番所山と呼び、役人の居住していた御番所屋敷と共に、当時の名残をとどめている。

唯七はお浦奉行として島に三年間勤めているが、その間島の子供達に武道と「読み・書き・そろばん」を教え、島民に深く親しまれていたという。

後年南郡に寺子屋が出来てまだ四ヶ所だけだった頃、その中に大島の寺子屋が入っているのも、こうした前身があったからであろう。

この大島を指して城下から船を操る時、唄われた俗謡にこのようなのがある。

大島五里じやァ
行きつきァ昼じやァ
持っちよる弁当は
孫（まんご）のみやげじやァ
運よく追風でも出れば幸いであるが、さもなければ汗を流しつゝ漕ぎに漕いで半日を要したと思われる。

日進月歩、今では海上五里を定期船で僅かに二十五分で走っている。

文化七年（一八一〇）藩の調査によると、大島の人口は男二三六人、女二〇六人の計四四二人で、大体現在の人口と同じであるが、大正・昭和の初期には一，五〇〇人程にふくれていた。

それが戦後は沿岸漁業の低迷と、一本釣りの限界を知ってか、教育熱が盛んとなり、進学の子供が多く過疎現象を呈している。

島は老人ばかりで淋しくなったが、その反面多くの英才が育ち、各分野で活躍している姿を見るとき、留守はしっかり守らねばと思う。そして何時かまた、大島が豊後水道第一の観光地として、開発される日の来ることを望んで止まない。

戦国時代、悲運の侍大将の二男が落住してより、四〇〇年の変遷に格別特異な歴史の跡は見るべくもないが、誠に感慨深いものがある。